

重度の痴呆 14%などであった。

D. 考察

特別養護老人ホームは、心身の著しい障害を有し、常時介護が必要で、自宅での看護が困難な人が入所している。入所時には、健康診断書により、活動性の疾患をもたないことが確認されている。基本的には生活の場であることから、入所者の ADL の改善は、本人のためばかりでなく、介護職の労働軽減にも結び付き重要な課題である。

今回の検討で、入所者の過半数は 80 歳以上で、死因では臨床的な老衰と心不全が 64%を占め、ある程度以上のコミュニケーションを取れる割合は 34%にすぎないことが明らかとなった。重度の痴呆は 14%であったが、実際上は3分の1は痴呆病棟に入所し、言語障害の一部は痴呆によるもので、痴呆がコミュニケーションの大きな障害因子となっていた。これらの実態は平成7年度社会福祉施設調査報告の結果とほぼ同じであった。

本研究の目的は特別養護老人ホームにおける介入の在り方と、効果の期待を明らかにすることである。コミュニケーションの取り方、また、痴呆症例での介入の在り方が実施上の大きな問題点と考えられた。

E. 結論

本年度の研究で以下のことが明らかとなった。

- 1.特別養護老人ホーム大府療の入所者の平均入所期間は約4年半で、76%がホームで死亡した。
- 2.死因の約3分の2は老衰と心不全で、明らかな疾患によるものは約3分の1であった。
- 3.入所者の内、ある程度以上のコミュニケーション

ョンが可能な割合は 34%であった。

F. 研究発表

- (1)名倉英一：高齢者総合診療外来。Geriatric Medicine36 (12) 1723-1736,1998
- (2) Nagura E et al. Acute leukemia in the elderly - a study of 179 cases in Nagoya- Blood92 (No10), Suppl 1, 212b,1998